

第3講 パラグラフ (4/30)

作成：田中重人 (准教授)

[今回のテーマ] パラグラフを構成する

1 前回課題について

- 雑誌のページ数は、巻全体の通し番号になっていることがある (号の最初が1ページではないもの)。また号毎ページと通巻ページの両方を振っている雑誌もある。
- 号数についても、巻別の号数と通巻の号数の両方がのっていることがある
- 複数の団体が出版に関与していることがある (たとえば学会と出版社)
- 「論文種別」は明記されていないことも多い
- 雑誌の名称が表紙からは判別しにくいこともある
- 出版年は漢数字や元号で書かれていることもあるが、文献表にのせるときは西暦の算用数字に統一する

2 今回の課題

前回の授業で挙げたキーワードのうち、どれかひとつをえらび、それについて説明する4-6個のパラグラフを組み立てよ。

- トピックと関連情報を箇条書きで配列したものをつくる
- そのことばを聞いたことはあって、意味がぼんやりわかるが、くわしくはわからない、という人向けの説明をつくること

3 「パラグラフ」とは

「飛ばし読み」(skimming) できることの重要性。

各セクションの見出しは、skimming のための手がかりをあたえる。

では、セクションの内部に関しては?

Paragraph: ひとつの topic (小主題) について記述する文の集まり。改行して、1字下げる (教科書 p. 62)。

ひとつのセクション内のパラグラフの数は、3 - 6個程度が目安。

- ひとつのトピックに関する文をまとめてパラグラフをつくる
- そのパラグラフのトピックを目立つ位置に書く
- パラグラフを適切な順序にならべる

4 トピックとトピック関連情報

パラグラフには、ひとつのトピックとその関連情報群を盛り込む。

4.1 トピック関連情報の種類

- | | | |
|-------|-------|-------|
| ・具体例 | ・詳細 | ・言い換え |
| ・抽象化 | ・一般化 | ・方法 |
| ・根拠づけ | ・原因 | ・結果 |
| ・評価 | ・引用 | |
| ・留保 | ・例外 | ・導入 |
| ・話題転換 | ・予備知識 | ・つけたし |

- この分類は網羅的なものではない
- ひとつの情報が複数の分類にあてはまることもありえる
- トピック関連情報の種類は、トピックとの関連できまる
- トピック関連情報にさらに関連情報を追加することはしない (そういうことが必要になった場合は、パラグラフを分割するか、注を使う)
- 「つけたし」はなるべくつかわないこと

4.2 教科書 pp. 59–60 の例

[トピック 1] 積もった直後の雪はすきまだらけ

: 密度が小さい

[トピック 2] 時間がたつとしまる

予備知識: 雪の結晶は互いに接している

詳細: 水蒸気が凝結して「氷の橋」ができる

詳細: 結晶の突起から蒸発して、すきまやくびれに凝結が起こる

詳細: 突起がなくなり、まるくなり、「氷の橋」が太くなる

詳細/言い換え: 密度が増す

[トピック 3] 踏むとどうなるか

[トピック 4] 密度が大きくなる

予備知識: 片足に全体重を掛けたときの圧力は約 240g 重/cm²

原因: 「氷の橋」と雪粒が破壊される

5 パラグラフの組み立てかた

- トピックを決める
- 関連して提示しなければならない情報をリストアップする。読者の想定に注意。
- リストアップした情報を取捨選択
- 必要に応じてパラグラフを分割・統合・削除・追加する
- 注を活用することも考える

文章を書き始める前に、紙の上で構成を考えること。2つの段階を踏んで考えるとよい。

材料集め：無秩序でよいので、思いついた／しらべた情報をメモしていく（教科書 pp. 25-29; 木村 1993, pp. 26-42)

メモ帳を持ち歩く；思考マップ, 想定読者との問答 (配布資料)

配列と構造化：材料が集まったら、どのトピックをどんな順序に並べるか、トピックのそれぞれにどんな関連情報をつけるかを定める。この時点で、鍵になる用語を決め、概念の定義をしておくといよい。

構成表, スケッチ・ノート (教科書 pp.52-54)

集めた材料のほとんどは捨てることになるのが普通である。

6 パラグラフの配列

起・承・転・結をわかりやすく配列して、ひとつのセクションをつくる。

起：そのセクションのいちばんはじめのパラグラフ

承：直前のパラグラフからの自然な展開

転：直前のパラグラフからの逆接的な展開

結：そこまでのパラグラフをまとめる

セクションは、通常、「起」ではじまり「結」で終わる。その間に、「承」「転」のパラグラフを必要に応じて配列する。ただし、「結」はない場合もある。「転」は逆説的な展開になるので、読み手に負担を与える。多用しないほうがよい。

7 宿題

- (1) 今日作成したパラグラフ構成をもとにして、4-6パラグラフの文章を書く
- (2) できあがった文章について、今日の課題と同様に、トピックと関連情報の配列を作成する
- (3) 参考にした文献などの一覧
- (4) 調査から執筆までの過程 (今日の課題を含む) について簡単にまとめる

コンピュータで作成して、印刷すること。A4判用紙の表のみを使う。全ての用紙の上端に番号と氏名を書き、綴じないで次回提出。今日の課題用紙も、次回提出する。

提出するものとは別に、(1)の文章をもう1部用意してくること。次回は、この文章を受講者どうしで交換して、互いにコメントする。色ペンと国語辞書を持ってくること。

なお、中間レポート(なんでも批評)についての素材をそろそろ絞っておくのが望ましい(5/14に執筆計画提出)。

8 文献

- 川喜田二郎(1967)『発想法』中央公論社.
- 川喜田二郎(1970)『続・発想法』中央公論社.
- 木村泉(1993)『ワープロ作文技術』岩波書店.
- 大島弥生 ほか(2005)『ピアで学ぶ大学生の日本語表現: プロセス重視のレポート作成』ひつじ書房.
- 梅棹忠夫(1969)『知的生産の技術』岩波書店.